

教師たちの創意工夫や挑戦
そして改革への情熱を描く

1分で分かる軌跡

2013年度に2校が統合して開校した静岡県・静岡市立清水桜が

丘高校は、独自の価値創出に向け、23年度に改革に着手した。総合的な探究の時間では普通科・商業科の混合チームで探究学習を実施し、定期考査は廃止して単元テストを導入。生徒が将来への目的意識を持てるよう、進路指導も見直した。統合校ゆえに合意形成の面で難航することもあったが、教師間での対話を通じて「ともによい学校をつくる」という意識が醸成され、新たな挑戦がしやすい学校文化が育まれつつある。

#普通科・商業科の併設 #探究学習の改善 #定期考査の廃止 #単元テストの導入

学校の特色化・魅力化

探究学習・教科指導・進路指導の
全方位で自校独自の価値をつくる

静岡県・静岡市立清水桜が丘高校

変革の背景

少子化の中、選ばれる
学校づくりが急務に

静岡県・静岡市立清水桜が丘高校は2013年度、静岡県立清水商業高校と静岡県立庵原高校が統合して開校した。普通科と商業科を併設する同校に入学してくる生徒の興味・関心や希望進路、学力は実に多様だが、2校が培ってきた歴史や文化を土台に、そうした生徒の多様性を踏まえながら、地域に根差した教育活動を展開してきた。しかし、同校を取り巻く地域においても少子化が進行。受験生から選ばれ続ける高校となるためには、同校独自の価値創出が急務となっていた。

その課題を重要視した静岡市教育委員会(以下、市教委)が23年度に「特色

化・魅力化検討委員会」(以下、検討委員会)を設置。市教委と外部の有識者

同校の有志の教師が委員となり、市立高校として静岡の未来を創る担い手を育成するために同校はどうあるべきか、議論を重ねた。その結果、地域と連携して取り組む探究学習の深化や、自律した学習者の育成に向けた個別最適な学びの実現など、改革の方向性が示された。そしてその方向性を踏まえたスクール・ミッション(以下、SM)とスクール・ポリシー(以下、SP)を策定した(図1)。委員の1人の江間啓之(えまけいし)の副校長は、策定の過程をこう語る。

「例えばグラデュエーション・ポリシーは、検討委員会に先立ち、委員ではない教師からも生徒に身につけてほしい力について聞き取り、最終的に3つの力とした案を作成しました。『イノベーション』など、カタカナの言葉

図1 スクール・ミッション、スクール・ポリシー(抜粋)

■スクール・ミッション

地域社会に貢献する未来の静岡の創り手を育むため、「つながらる学び×つかえる学び」を通して、自己を律する力、共に創り上げる力、突破する力を育成します。

■スクール・ポリシー(グラデュエーション・ポリシー)

- 自己を律する力 他者への配慮ができ、主体的に目標を設定し、達成に向けてひたむきに取り組む。
- 共に創り上げる力 自他の考えを尊重し、対話を通して仲間とともに課題解決に導き、その喜びを共有する。
- 突破する力 柔軟な発想と行動で自己の限界を打ち破り、自他の幸福を追求する。

※学校資料を基に編集部で作成。

は教師にも生徒にも分かりにくいのではないか』『○○力』などと表現は統一した方がよいのではないか』というように、文言にもこだわりました。また、校内での議論は職員室の隣にあるガラス張りの部屋で行い、委員以外の教師に議論の様子が見えるようにしました」

学校概要

設立 2013(平成25)年

形態 全日制/普通科、商業科/共学

生徒数 1学年約240人

2025年度卒業生進路実績 国公立大は、山梨大、静岡大、愛知教育大、三重大、東京都立大、山梨県立大、静岡県立大などに23人が合格。私立大は、中央大、法政大、明治大、早稲田大、南山大、関西大などに延べ246人が合格。短大・専門学校進学43人。就職40人。

変革の一手

2学科の混合チームで 取り組む探究学習に転換

24年度は具体的な改革に着手した。

検討委員会の委員だった教師や、前校長が指名した研修課の小泉真由子先生、教務課（当時）の小泉龍馬先生、進路課長の金原直樹先生らから成る「魅力化小委員会」（以下、小委員会を校内に設置し、SMやSPの実現に向けて何をすべきか、議論した。課題は、取り組む内容の検討もさることながら、2校の統合校の教師が合意形成を図ることだった。そこで、全教師が参加する校内研修を何回も実施して改革の方向性を共有しつつ、総合的な探究の時間（以下、総合探究）の刷新や単元テストの導入、教育課程の改編、進路指導の見直しなどを少しずつ進めていった。主軸となった取り組みを順に見ていく。

総合探究では、小泉真由子先生と小泉龍馬先生が22年度から進めてきた改

革を加速させた。

「本校の総合探究は21年度まで、学年部ごとに担当する体制を採っていました。総合探究を本校の特色とするために、現行の学習指導要領が実施される22年度に全校体制に刷新しようと考えました。しかし、それでは先生方の戸惑いが大きいのではないかと思い直し、22年度は私と小泉龍馬先生が受け持っていた2年生で、外部のコーディネーターの力も借りて地元企業と連携する探究学習を導入し、23年度は持ち上がった3年生で自己探究に取り組む探究学習を実施しました。そして1年生の担当となった24年度に、学校全体での刷新に踏み切りました」（小泉真由子先生）

まず、各学年部で2人の教師が総合探究の担当となり、研修課と各学年部が連携する体制を整えた。そして、総合探究の3年間の指導計画の作成にも着手。1年次はグループ探究とし、「静岡市の持続可能な開発」「パラスポーツ」など、6つのテーマから生徒は自分が興味・関心のあるものを選び、各テ

マ内で2学科の生徒が混合のチームを組み、地元企業から助言を得ながら取り組む探究学習とした。2年次は生徒が自分で設定した課題について探究する個人探究とし、3年次は過去の出来事と関連づけながら将来の自分を展望したスピーチを行う自己探究とした。

改革後の総合探究の最大の特色は、2学科合同で活動に取り組む形にしたことだ。教師からは当初、「2学科合同で行う意味はあるのか」「普通科と商業科では探究テーマが合わない」といった声が上がったと、現在研修課長を務める小泉龍馬先生は語る。

「2学科合同の活動とすることに慎重な意見も出ましたが、前校長が『これは本校の特色になる。まずは実践してみよう』と判断しました。そして、専門が異なる生徒が一緒に活動すればSMに掲げる『共に創り上げる力』が育成されることや、専門的な学びの『課題研究』と自身のあり方・生き方を追究する総合探究とでは目的が異なることなどを繰り返し説明し、時間をかけ

「これは本校に必要な取り組みだから」。

その言葉で実施に踏み切れた



商業科長、研修課
小泉真由子
こいずみ・まゆこ
同校に赴任して6年目。
商業科。3年部。



研修課長
小泉龍馬
こいずみ・りょうま
同校に赴任して9年目。
数学科。3年部。



進路課長
金原直樹
きんばら・なおき
同校に赴任して7年目。
数学科。3年部。



副校長
江間啓之
えま・けいじ
同校に赴任して4年目。



校長
坪井保人
つばい・やすひと
同校に赴任して1年目。

お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任

で新たな形への共通理解を図っていました」

単元テストを導入し、教育課程は3年間で6単位減に

自律した学習者の育成に向けて、定期考査を廃止し、単元テストを導入した。24年度は一部の教科・科目で単元テストを試行し、25年度は全教科・科目に展開。各教科・科目の特性に応じたパフォーマンス課題も導入し、学習評価の多面化・多角化も図った。

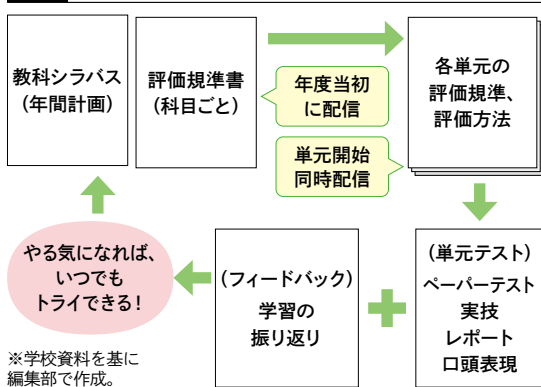
「定期考査では、考査の前だけ集中して勉強し、考査を乗り切る生徒が少なくありませんでした。そこで定期考査の代わりに単元テストを実施することにした。単元テストは定期考査に比べて出題範囲が狭く、学習や振り返りがこまめにしやすいため、学習内容が着実に定着するのではないかと考えました。生徒が『分かった』と自分の理解を実感できれば、『もっと知りたい』といった学習意欲の向上にもつながると期待しました」（江間副校長）

同校の単元テストは「自習20分間＋テスト30分間」など、テスト時間は20～30分間を目安とし、前時やテスト前には自習時間を設ける形に統一。年度当初に全教科・科目のシラバスを配布し、単元開始時には該当単元の評価規準と評価方法を明示して、生徒が自分

で学習のサイクルを回せるようにした（図2）。当初は「学習のペースがつかめず、大変」といった声が生徒から多く上がったが、今では「学習習慣が身についた」「毎日の授業の大切さを実感している」といった声が上がっている。

また、「生徒の主体性を尊重し、生徒に時間を返す」という方針の下、教育課程を改編した。改編前の履修単位数は2学科とも各学年32単位（LHRを含む）だったが、改編後は30単位とした。さらにDXハイスクールの指定校として「情報Ⅱ」を設置し、普通科でも商業科の専門科目2科目を履修できる仕組みにした。改編案は教務課が中心となって作成。各教科内で検討した内容を各教科の代表者による会議で議論し、その結果を各教科に持ち帰ってまた検

図2 単元テストを軸とした学習サイクル



なりたいたい自分があるからこそ自ら学ぶ。

生徒が自分の将来を

じっくり考える活動が必要だった

討するといったプロセスを繰り返した。7案目で合意に達し、26年度から各学年30単位の教育課程を実施している。

「普通科には特別進学クラスを1年次から1学級設けていたため、改編しても国公立大学の一般選抜に合格する学力を担保できるのか、校内で議論しました。その結果、特別進学クラスは維持し、3年間で6単位減らしても合格に必要な学力をしっかりと育む教育課程とすることにしました。ただ、SMに掲げる『共に創り上げる力』の育成を踏まえて26年度からは、特別進学クラスの設定を2年次からに変更し、1年次は生徒が多様な仲間と日常的にかかわり合えるようにしました」（金原先生）

生徒に時間を返すからこそ、将来をじっくり考えさせる

進路指導も自律した学習者の育成の観点から見直した。それまで週末課題としていた進路学習はLHRに組み込

み、キャリア意識を高める講演や大学・学部研究などの時間をキャリアナビ（*1）を取り入れながら大幅に増やした。

「なりたいたい自分が明確になると、人は主体的に学ぶようになります。生徒に時間を返したのは、生徒が自分の将来について調べ、じっくり考えることで明確な目標を持てるようにする活動が生徒に必要なことからです」（金原先生）

そして、面談週間や講演会、模擬試験など、1～3年次の進路指導の流れと各指導において重要な点を普通科・商業科それぞれについて示した「進路指導概要」を作成。教師間で指導の目線を合わせ、生徒を支援するタイミングがクラス間でずれないようにした。

「各教師の個性を生かした指導や、生徒の状況に合わせたアプローチを尊重しつつ、面談で生徒や保護者に伝えるべき事項や生徒に声をかける時期など、本校の進路指導で大切な点については目線が合うよう、進路指導概要の文言や見せ方を工夫しました」（金原先生）

*1 ベネッセが提供する、進路・探究・表現学習を統合的に支援するデジタル教材。

*2 ベネッセが提供する、「学校の授業・指導」「生徒の学習」支援のためのICTプラットフォーム。

変革の成果と展望

変化を恐れず挑戦できる 学校文化に

一連の改革を経て、教師の意識は変化してきている。

「検討委員会や小委員会での議論、校内研修などを経て、学校をよりよくしていく」とする教師一人ひとりの意識の高まりを感じています。いくつもの新たな取り組みを進めていく中で、既存の方法にこだわらず、変化を恐れずに挑戦する文化が少しずつ醸成されているのかもしれない」（江間副校長）
例えば今年度の3年生の総合探究で

は、人気テーマパークの元スタッフによる、「企業が求める人材」をテーマとした講演を行った上で、そのテーマパークを遠足で訪れ、プロの仕事を肌で感じ、学んだおもてなしの精神を文化祭の一般公開で発揮するという活動を行った。

「2学科合同で総合探究と学校行事が連動する活動を提案したところ、先生方から以前のような戸惑いの声が出ることはなく、各部署から『本校ならではの取り組みだ』と賛同を得て実施できました」（小泉龍馬先生）

そうした学校全体の改革を後押ししようと、今年度着任した坪井保人校長は、自身の考えを発信する「勇気づけ通信」を教師に毎月配布している。

「学校全体で同じ目線で目標に向かうことは難しいものです。例えば単元テストについて、『テストの実施回数が増えたことで、作問の負担が大きくなっている』といった声もあります。そこで、『自律した学習者の育成に向けて日常的に学習することへの意識づけが図れるのが単元テストです』と伝えていきます。

校長である私が取り組みの価値を発信することで、先生方が前向きに取り組めるようにしています」（坪井校長）
生徒も変化しつつある。「生徒全員が楽しめる体育祭になるよう、種目を変更したい」と体育祭実行委員会が職員会議で内容変更を提案。教師と議論した結果、24年度から種目を変更した。

また、文化祭の一般公開は「自分たちが楽しむもの」から「来場者をもてなすもの」へとプログラムが変化しつつある。学力面も変化の兆しが見られる。模擬試験では例年、2年次の7月から11月にかけて成績が下がる傾向にあったが、25年度の2年生は堅調に推移し、1年生も同期間で成績を維持した。模擬試験実施の2週間前から、(OS)（*2）で問題配信を行うなど、新たな試行が生徒の学習意識や学習習慣にどう影響するのか、今後の動きも注視している。

「今後は、この2、3年間で挑戦してきた新たな取り組みの質の向上と定着に注力し、本校独自の価値を築いていきたいと思っています」（坪井校長）

変革の軌跡を振り返って

丁寧な対話と地道な声かけの

積み重ねによって、変化が起きた

小泉真由子先生



本校に赴任した1年目に総合探究の担当を任せられました。当時は学校全体の指導計画がなく、だからこそ新しい価値を創り出す好機だと捉えました。ただ、学校全体をいきなり変えるのは難しいと考え、小泉龍馬先生と「数年後に頑張つてよかったなればよいよね」などと励まし合いながら、1学年ずつ活動を改善していきました。

本校の生徒の課題である自ら考えて動く力を育む、社会とつながる学びを実現するためには、探究学習の改善は不可欠でした。しかし、それまでの指導が通用しづらくなるため、学校全体での共通理解をどう図っていくか、頭を悩ませました。初期段階で外部のコーディネーターに入ってもらったのは、現場の教師と私たち運営側との間を客観的な視点でつないでもらうためです。また、探究学習を担当する他校の先生方と対話を重ねることで自校の取り組みを客観視し、その意義を再確認しました。

め、研修やイベントも実施しました。最初は4、5人ほどしか参加者はいませんでした。が、関心がありそうな先生に地道に声をかけるうちに参加者は少しずつ増えていきました。そうして互いの価値観を語り合える雰囲気が生まれていきました。

価値観の異なる教師間で根強く対話を重ね、目的を共有できたからこそ、多様な意見をよりよい学校づくりのための推進力に変えられる今の体制が構築できたと思っています。反対意見も含め、生徒の未来を思つて積み重ねてきたすべての議論に意味があったと確信しています。

お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任

Web VIEWnext ONLINE

関連記事はこちら!

今回のテーマに関連する過去の記事は、教育情報総合サイト『VIEW next ONLINE』でご覧いただけます。

2025年11月号 指導変革の軌跡 千葉県・私立東葉高校

▶ https://cdn.view-next.benesse.jp/view_section/bkn-hs/article34122/

